

# 巻頭言

## 学会について思うこと

日本油化学会フェロー 岩橋 槇 夫



本棚を整理していて、学生時代に読んだ「フランクリン自伝」が目にとまった。ページをめくっているうち、もう一度読み直すことにした。若い時と、受ける感覚が全く異なったからである。若い時は、独立宣言の起草者の一人という興味からアメリカ史の1ページを知るためだけに読み、フランクリンの若い人に向けての人の生き方や教訓に対して、「アァーこんなお説教がある」と眺めていた。フランクリンが実行していた有名な13の戒律（節制、沈黙、規律、決断、儉約、勤勉、誠実、正義、節度、清潔、平静、純潔、謙譲）も読みなおしてみると、私自身、若気の至りとはいえ、身勝手から幾人かの方に嫌な思いをさせ、また、いくつか赤面するようなことをしたかを思い出した。今更ながら、フランクリンの考えた方、思想が素晴らしいと思った。しかし、いくら良い人生訓を眺めていても、実際に同じような経験をしなければ身につかないとも思った。

「歴史から学べ」としばしば言われる。科学・技術文明は大きく進歩したが、人間の本性は古来変わらず、進歩していないので、歴史は繰り返す。現在、世界的な風潮にある自国ファースト、多様性の排除、自分と考えの違う者の排除は、また大きな世界的過ちに導くと思う。フランクリンは自伝で、「つねに控え目な言葉で、自分のことを主張する習慣だけを残し、人に対して断定的な感じを与える言葉を一切使わない」、また宗教に対しても「宗教はその本質以外には、人間の道徳性を鼓吹したり、うながしたり、また強めたりするようなものがなく、かえって人間を分裂させ、互いに不和にさせる信仰個条が多少混じっているのだから、一つ一つの宗教によって尊敬する度合いを違えていた。私は悪い宗派もいくらかは役に立つこともあるという意見で、全ての宗教を尊敬していたから、他の人の宗教について、そのいただいている信仰の念を弱めるような議論は一切避けるようにしてい

た」と書いていた。国をまとめあげるために、「多様性の受け入れ」、「良好な人間関係の構築」、「宗教間の対立を避ける」ことの必要性は今も昔も変わっていないことを感じた。そういう意味で本学会は産学官の垣根がなく、国内だけでなく国際的に多様性を受け入れている素晴らしい学会だと思う。

フランクリンを含め、昔から偉人は自身の失敗を通じての実感を人生の言葉として残したと思う。フランクリンとは関係ないが、「窮すれば通ず」という易経からの言葉がある。「日本語大辞典」によれば、「行き詰ってどうにもならないところまで来てみると、案外打開の道があって、なんとかるものである」と書いてある。しかし、これは省略形で、本来は、「窮すれば即ち変ず、変ずれば即ち通ず」で、究極のどん詰まり状態になったとき、必ず情勢の変化が起こり、変化が起こればそこからまた新しい展開が始まるを意味している。即ち、窮する状態におかれた時、おのれ自身が何も変わらなければ、新しい展開は起こらないのである。他の学会もほぼ同様と思うが、本学会も正会員の減少傾向が問題になって久しい。窮する状況におかれて、本学会も変わろうとしている。例えば、年会の活動を活発にして、学会がいかに魅力的であり、学生および企業の新人の加入を勧め、新会員の増加を図ることは、最も行わなければならないことで、総会でも基本方針とすることが認められた。ただ、会員減少の一因には、定年を迎え仕事と関係がなくなった方があっさりと辞められてしまうことにもある。学会に貢献しておられたかなり著名な方々も辞められてしまっている現状をみると、一抹のさびしさを感じる。定年後の会員に対する適切な処遇や魅力的な企画で学会活動への参加を促す更なる変革を願っている。

コーセー美容専門学校校長（北里大学名誉教授）